

無尽・頼母子講から普通銀行へ

——明治前期における長野県塩尻銀行を事例に——

近畿大学 岩間 剛城

本報告の課題は、講を歴史的前提として設立された普通銀行についての事例の検討を通して、明治前期における地方金融機関の特徴を考察することである。石井寛治（『経済発展と両替商金融』有斐閣、2007）は、東京・大阪などの大都市において、両替商から銀行が設立された事例を分析した。これにより、近世金融と近代金融との関連性が改めて注目されることとなった。ただし戦前日本においては、朝倉孝吉（『明治前期日本金融構造史』岩波書店、1961）でも指摘されているように、大都市にとどまらずに、農村地域も含めて、全国各地で多数の銀行・金融機関が設立されていた。朝倉は、明治前期における地方金融機関については、徳川時代から引き続いて検討を行うことが重要であると指摘している。なお近世金融史研究では、森嘉兵衛（『無尽金融史論』法政大学出版局、1982）が無尽・頼母子講について歴史的分析を行っているものの、近代金融との関連については、必ずしも十分な検討がなされていない。明治前期の日本において、多数設立された中小金融機関の事例を歴史的に検討することは、近世から近代にかけての地方金融の状況を考察する上で、必要な作業であると考えられる。

本報告では、事例として長野県小県郡塩尻銀行を取り上げる。塩尻銀行が設立された長野県小県郡上塩尻村は、上田藩領に属しており、また同村は幕末期には日本国内有数の養蚕製糸地帯となっていた（長谷部・高橋・山内編『近代日本の地域社会と共同性：近世上田領上塩尻村の総合研究』刀水書房、2009）。同村においては、天保期以降に講である「永続講」が形成された。そして、この「永続講」を歴史的前提として、1880年に塩尻銀行が設立されたのである。以上のような塩尻銀行についての歴史的検討を通して、明治前期の地方金融機関に関する一考察を行いたい。

